

寺報

信仰文化

通刊38号

千葉県いすみ市荻原2136 ☎0470(86)3816
行元寺発行 FAX 同上

歓迎

観光・研修旅行

土・日・祝 個人・一般公開
平日 予約 団体等

10:00~16:00

文化財修復基金 ひとり300円志納

北斎「神奈川沖浪裏」
— 房総浮世絵美術館提供 —

北斎が南総にやって来た！

伊八・等琳・等随 推考交友録から

北斎名画誕生秘話

北斎と南総の地、ことに行元寺と飯縄寺は北斎の交友を紹介して、深い結びつきが考えられる。以下、伊八、等琳、等随との推考交友録である。

上野界限での等琳と等随

北斎は転居の達人としても知られる。引越すること生涯に九三回、識者はこれを評して画境の開拓と躍進にあたつたとする。その中でも比較的長く住んだのが、上野山下辺で享和元年（一八〇三）ごろから数年間、いわば北斎が一番血気盛んなときだった。

この間よく上野寛永寺界限を歩いて「上野」の画題を中心に「上野晚鐘」や「根本中堂」「にない堂」など多くの浮世絵を描いた。このことで寛永寺に出入りして、僧たちと面識があった。画僧の等随は

じめ伴頭職（学頭職の下にあり現在の副学長職か）の慶伝や栄長を知った。この慶伝と栄長が、のち行元寺住職として晋山すること縁は深い。

また、三世堤等琳とも友人として親密な関係ともなった。機会は護国寺での達磨半身像を北斎が描いたときだ。一二〇畳敷の達磨図を書くため、藁筆の柄を長くして、その端に石を吊り下げ、柄を肩にかけて、酒樽に入れた墨をつけて大紙にいつきに書いていく。この様子をみて驚いたのが堤等琳だった。

馬琴の食客
南総への憧れ

このあと、北斎は読本の挿絵に勢力を集中したことで、その独特の画法は人気絶頂にも達した。挿絵を描くこと実に一万三千枚という。文化

三年（一八〇六）挿絵を描くため馬琴の食客となっていた。北斎と馬琴は門弟のごとく親しく、北斎が麻裏草履をはいて外へ出ると、馬琴が後ろからついてきたという。

このころ馬琴は「南総里見八犬伝」の構想を「里見記」「里見九代記」さらには中村国香（いすみ市長者住）の「房総志料」を手元に置いて読破していた。この「房総志料」は南総の雑談や奇説をも書かれており、その上、書き出しが「荻原行元寺」で始まるのも奇縁で、馬琴が八犬伝執筆に果たした役割は大きいとされる。

また、当時最大の人気作家山東京伝と弟の京山が、ともに南総の夷隅郡神置村（現いすみ市神置）出身とされる「白藤源太談」また「花角力白藤源太」を執筆中だと馬琴は知った。かつて若き滝沢馬琴は酒一樽を下げて、京伝の弟子にして欲しいと頼んだこともある。しかもその挿絵を北斎のライバル豊国が描いていて、白藤源太の錦絵は人気の頂点にあった。ほかに新内節や歌舞伎に登場して巷間の話題をさらっていた。

一方、北斎は伊八への関心

は強かった。日蓮宗信者の北斎は堀之内（東京杉並区）の妙法寺で伊八の彫刻をみて感



伊八「波に宝珠」 ～複数の視点からみて彫る～

動した。その伊八と等随が南総行元寺で書院の杉戸絵や欄間彫刻を制作中と聞けばなお更だった。加えて八犬伝の挿絵との関係から、南総の風土を知る必要にせまられていた。

文化三年（一八〇六）六月、北斎は南総へ旅立ちする。このことは木更津の日技神社の奉納額「富士の巻狩り図」に、「画狂人北斎旅中画」とあるこ



伊八の波図彫刻

等随

「土岐の鷹」制作中

とで立証されている。ついで立寄ったのが久留里だ。久留里藩士の梅暮里谷峨が、本所埋掘藩邸から久留里に帰って「山椒大夫」の読本を執筆中で、その挿絵を頼ま

久留里から山越えで大多喜城下へ、更に荻原行元寺へと向かう。ときの住僧榮長は、寛永寺の画僧等随を連れてきて杉戸絵を描かせていた。北斎は等随と昵懇の中だけに等随は喜んで迎えたであろう。墨書の「松柏図」四面（現存しない）は完成していて、「老梅に白鷹」その裏は「獅子二態」だが、制作中だった。

白鷹が老梅に羽根を休め、頭を左に向け鋭い眼光と爪に力強さが溢れていた。これは「土岐の鷹」で美濃国にあった土岐頼芸のシンボルだ。強く生きたいと願ったのだが、家来の斉藤道三に国を追われ、逃避行の末に万喜城（いすみ市万木）に亡命、この間に行元寺で仏道修行に励んだとい

う。絵を描いた等随は字は淡山、偏無斎と号し、いまの栃木市片柳の寮坊五楽院に住したことで五楽院等随の名がある。等随の元祖は高松又八郎邦教に逆上り、不思議なことに行元寺本堂の彫刻、「龍」「錦鶏と牡丹図」、向拝の「唐獅子」「猿」など名作を残した徳川家御用彫師である。北斎も親しく看とれたに違いない。



杉戸絵 等随「土岐の鷹」

怒涛に新機軸発見

「伊八の波」

別部屋では「波の伊八」が波図彫刻にのみを振って挑んでいた。北斎が訪れたその時は波図は完成してはなく、横波・鶴など制作半ばであった。これまで伊八は住職の馬を駆って、毎日のように九十九里浜南端の太東崎の荒海の中に入って、崩れる横波を凝視し続けた。波は瞬時として留まらない。現れたと見れば崩れ散って消え、また新しい波がうねり押し寄せてくる。

伊八はこれまでの粉本にならぬ横波の波頭、荒波の腹部を

下から覗き上から見おろした。複数の視点から見た光景を脳裏にみごととどめた。波を彫刻であらわすこと自体、絵画と異なると修正も効かない。失敗は絶対許せないのだ。

形あるものは消える。栄長のことばに伊八は波に無常を感じた。般若心経の色即是空の「空」を会得した。これを宝珠で表現した。加えて波裏の彫法に北斎は新機軸を発見した。

彫刻でいう規矩準繩いや規矩方円をみごと駆使して彫っ

ているではないか。規はブンマワシ（コンパス）それに差し金、水盛り、墨つぼの糸を垂れての仕事に北斎は大きな感動に浸った。そこに立体感、写実、遠近法といった幾何学的手法に魅了を覚えた。

北斎が前に描いた「おしをくりはとうつうせんず」や「賀奈川沖本笠之図」は、どこか生氣に乏しい。これがやがて北斎の代表作「賀奈川沖浪裏」に転生するのだが、飛び散る浪の表現はまだない。伊八の「波に宝珠」の完工を、北斎は楽しみに待つこととした。

伊八の「波図彫刻」は翌文化四年にかけ完工した。そのあと伊八は故郷打墨（現鴨川市）に一旦立寄り、いまの南房総市や館山市内の数か寺の彫刻と、ときに泉水池を造成するといった器量の大きさを発揮した。

房州での仕事を終えた伊八は、その翌年書院奥の間正面に「松竹梅」図を彫って完工、その銘に

当山三十七世現住栄長代彫物工 房州長映郡打墨彦
武志伊八良信由作

弟子久八

千時文化六己巳年四月吉祥日

堤等琳「龍図」と怒涛凝視！

北斎がつぎに訪れた飯縄寺本堂は一年前の文化二年（一八〇五）三月に竣工している。この落慶法要の導師をつとめたのが行元寺栄長だった。この本堂の内陣と外陣を区切る結果上部に伊八の「牛若丸と天狗」「波の飛龍」の大彫刻がある。「牛若丸が天狗より極意を授けられる」場面であろうが、厚手に豪快な彫りに生氣が躍動し、また飛龍に呑み込まれそうな威圧を感じる。

この伊八の彫刻に浸った北斎は内陣天井画の「龍」に見とれた。これが雪山、つまり堤等琳の作だからである。北斎は直接等琳から聞いてあったであろう。線描太く輪郭がはつきりして、円を描くように全身をくねらせている龍の姿態だ。その尻尾と鱗部分に点描とも受取れる等琳独特の特色を見出した。また枅に描いた花鳥図、蓮華、牡丹図に感銘した北斎である。

ついで北斎は太東岬を訪れたであろう。伊八の波図を通して太東岬の怒涛に深い関心を寄せていた。怒涛逆巻く波

を、いや波の腹を見上げ見下ろす。精細な波の観察に終始した。凝視しては手早くスケッチする北斎の様子が目に見えるようだ。かれ独特の新工夫を加え、画期的な作品を願ったの波の大写だった。

南総行脚から江戸に帰った北斎は、馬琴と「水滸伝」の挿絵の件でいさかいを生じ、この後編刊行に版元は困って馬琴をおろして高井蘭山が引き継いだ。あれほど密だった二人は文化九年ごろには絶交状態となつて、北斎は読本の挿絵の世界から遠ざかっていた。

北斎は居を馬琴宅から等琳の許へ移す。南総から帰った北斎は等琳を師と仰ぐようになる。文政三年（一八二〇）北斎は戦斗の号を改め「為二」と称するようになった。「二」に帰り新たな出発を願った「為二」名であろうか。いやそれ以上に等琳との関係が考えられてくる。北斎よりはやく等琳の弟子となつたのが、行元寺で杉戸絵を描いていた等随で、北斎より前に「無為」の称号を与えられていた。こ

等琳の許へ移る

北斎は居を馬琴宅から等琳の許へ移す。南総から帰った北斎は等琳を師と仰ぐようになる。文政三年（一八二〇）北斎は戦斗の号を改め「為二」と称するようになった。「二」に帰り新たな出発を願った「為二」名であろうか。いやそれ以上に等琳との関係が考えられてくる。北斎よりはやく等琳の弟子となつたのが、行元寺で杉戸絵を描いていた等随で、北斎より前に「無為」の称号を与えられていた。こ

んなことで等琳に門下生二人を得た。為一は富嶽三十六景がまとまる天保四年（一八三三）まで続く。

観法と

点描法の伝授

等琳の得意とした画法に観法がある。まさに浅草寺に奉納した「韓信の股くぐり」（一

八四センチ・二一九センチ）の大絵馬は今に伝わり圧巻だ。のち北斎が描く「跨ぎの不二」や「たかはしの不二」は股の間から橋脚の下から富士を小さく覗く。その図柄の奇抜さはその典型といつてよい。

また北斎が洋風趣味のもと描いた「おしをくりはとうつうせんず」賀奈川沖本笠之図は、波を描いて盛り上がる形



行元寺山門 一顔料に岩絵具を駆使して復元

態は両者共通だが、どこか生氣に欠けた重々しい波だ。そこには飛び散る波しぶきの表

「神奈川沖浪裏」と等琳・伊八

北寿・北溪と外房

このころ、文政五年前後に北斎は再度南総への旅に赴いたものと考えられる。これに就いては北斎伝やその他の記録に見えないが、高弟の昇亭

北寿が描いた「上総九十九里地引網大漁鯨正写図」の立体感に刺激され、また「神奈川沖浪裏」完成のために、伊八の「波に宝珠」を再度確認と、等随の「鷹図」の完成作品を見ることにあつたと考える。

さらに文政五年秋には、弟子の魚屋北溪が長者町（現い

山門裏面彫刻、

中通彫刻復元

21年完工予定

JR東日本文化財団支援金、今年度二百万円、および拝観料、篤志者からの寄付金、浄財等をあて、21年秋には裏面と中通彫刻彩色復元が完工の予定です。

現はない。等琳はまた点描法なる技法を北斎に示した。波しぶきがそれであつた。

すみ市）に来て、江戸屈指の間屋「伊勢八店」の絵馬を描いて町内の天神社に奉納している。長者町出身の忠兵衛が描かせたのだが、北斎の再度南総への来訪と関係あるかも知れない。

等琳の教授と伊八の波図に再度接したことで、長年の夢が果たせた。巨大な波が飛沫をあげながら、砕け落ちようとしている。そして波の裏面をいや腹部を、視線を低くしつつ波を見上げ、舟を上から見下ろすといった複数の視点から描いた。伊八が馬上から波を見上げ見下ろした、「波と宝珠」の彫刻に共通している。

この北斎の点描法をとり入れたのが、ゴッホだった。かれは非常な感激を覚え遠く海外から北斎を私淑していた。ピカソにしても同じく北斎を慕った。「神奈川沖浪裏」を低い視点から見上げる。舟を上から見下ろす、いわゆるピカソのキュビズム（立体主義）に関連する。また西洋ではじめて怒涛逆巻く波裏を描いたのがクールベで、北斎の作品より六〇年のちのことである。さらにドビュッシーの海の曲は「神奈川沖浪裏」から受けた靈感によるとされる。

北斎の前に北斎はなく、風俗画、美人画の添え画だった風景を独立させ、浮世絵風景画なるジャンルを開拓、大成した貢献に敬意の念しきりだが、北斎に影響感化を及ぼした、堤等琳や等随、波の伊八の存在は看過できないと思う。

行元寺住職 市原淳田

西洋文化へ

大きな影響

こうして生まれたであろう「神奈川沖浪裏」は、世界絵画史上画期的新機軸とされ、世の絶賛を浴びたのである。

吟醸酒「波の伊八」
「錦鶏雄」
純米酒「錦鶏雌」
いすみ市荻原3918
市原酒店
0470-86-3343